河原院の歌人達の和歌序：集成・校訂および特質・意義の考察

山本 真由子

Citation	人文研究. 第 69 巻. p.59-79.
Issue Date	2018-03
Type	紀要論文 = Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Description	この論文の最新版は、 **山本真由子著『平安朝の序と詩歌―宴集文学攷―』塙書房, 2021 年 2 月, 334p. ISBN : 978-4-8273-0136-6.** に収録されています。引用は最新版をご覧ください。
Rights	© 2018 山本真由子. この記事は「私的使用」にかぎり利用できます。 For Personal only. No other uses without permission.
doi	10.24544/ocu.20180412-005

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第69巻　2018年3月　59頁～79頁

研究論文

河原院の歌人達の和歌序 ――集成・校訂および特質・意義の考察――

山本　真由子

平安時代、村上朝の末頃から花山朝にかけて（九六〇年―九八六年頃）、河原院という寺院において、庵主安法法師を中心に、十名ばかりの歌人が交遊を重ねた。先行研究では、これらの歌人達が、新たな和歌表現を開拓し、後世盛んに詠まれた定数歌「百首歌」の創始と流布に深く関わり、和歌史に大きく寄与したことが指摘される。

しかし、これらの歌人達が、仮名文の「和歌序」を数多く書いたことは、従来、殆ど注目されて来なかった。本稿は、これらの序の特質に検討を加え、和歌史における意義を考察する。和歌序は、歌集および歌会で詠まれた歌に冠せられ、和歌詠作の経緯や動機が、修辞を巧みに用いた文章で記される。仮名文の和歌序は、紀貫之（生年未詳―九四五年歿か）が創始したとされる。歌人達は、歌会の序および「百首歌」や個人の歌集の冒頭に附す序を書いている。これらの序には共通した表現・用語が見られ、漢文の修辞の摂取が窺われる。河原院の歌人達は、和歌序の継承と展開にも重要な役割を果たしたと考えられる。

一、はじめに

村上朝の末頃から花山朝にかけて（九六〇年―九八六年頃）、河原院に住む安法法師のもとに、多くの歌人達が集った。これらの歌人達が書いた仮名文の和歌序について、その表現の特質、和歌史における意義を考えてゆきたい。

河原院は、『拾芥抄』（中巻・諸名所部）に「河原院、六条坊門南、万里少路（ママ）東八丁云云、融大臣家、後寛平法皇御所、本四丁京極西」とある。[1] すなわち河原院は、平安京の六条坊門の南、万里小路の東という鴨川沿いに作られた、嵯峨天皇の皇子、左大臣源融の邸宅であり、後に、寛平法皇つまり宇多法皇の御所となったという。山崎正伸氏によると、法皇に奉られたのは、融の死後、延喜十七年（九一七）頃と推定され、そのことにより河原院と呼称されるようになったとされる。[2] 承平元年（九三一）の法皇崩御直後の伝領関係は不明である。応和二年（九六二）九月五日庚申には、安法法師が河原院歌合を行っている（二十巻本歌合目録）。この頃には、源融の曾孫にあたる安法が庵主となっていたと考えられる。

河原院に出入りした歌人達については、考究が重ねられてきた。犬養廉氏は、安法と交友した歌人として恵慶法師、源順、清原元輔、大中臣能宣、平兼盛、源重之、源為憲などの名を挙げる。[3] また、氏は、歌人の多くが、嵯峨源氏（順）、光孝源氏（為憲）、光孝平氏（兼盛）といった王氏の末流であると指摘する。順、元輔、能宣は、天暦五年（九五一）、勅命で撰和歌所に召された、いわゆる梨壺の五人に加えられていた。その他の歌人も家集が今日まで伝わる者が多い。

歌人達の和歌には、さまざまな共通点が指摘されている。藤岡忠美氏[4]、山口博氏[5]は、官位の進まない不遇の嘆きや、不安な生活ゆえの無常観を表現しているとする。また、川村晃生氏[6]、近藤みゆき氏[7]は、漢詩文の方法を用いた和歌の新たな詠法が見られることを指摘する。近藤氏や、西山秀人氏[8]は、歌人達の特徴ある表現は、一人の歌人から他の歌人への影響ではなく、詠歌の応酬によって生じた共有的表現であるという見方を示す。

さらに、『恵慶集』の「恵慶百首」の序に、天徳末年（九六〇年頃）に曾禰好忠が百首歌を創案したことが見える。[9] 好忠の百首には、源順や恵慶法師が「返し」の百首歌を詠んでいる。これらの百首歌を含めた初期定数歌の表現については、久保木寿子氏[10]、金子英世氏[11]や松本真奈美氏[12]が論じており、河原院の歌人達が、初期定数歌の形成や享受にも関わりがあったことが認められている。

しかし、これらの歌人達の多くが、仮名文の和歌序を書いていることは、注目されてこなかった。僅かに、久保木寿子氏[13]が、「好忠百首」の序の性格を検討する中で、『順集』と『恵慶集』に収められた和歌序（氏は「歌序」という）を三篇、取り上げている。氏は和歌序の形式は当時の詩序に倣ったものとする。好忠の序は、和歌序の形式のうち作者の謙辞を述べる部分のみで構成され、このことは和歌序の制作される権門の歌会に立ち合えない好忠の立場を暗示し、「自らの場」として「百首」を構想させたかとする。また、三篇の和歌序から、「用例が少ないので断定はむずかしいが」、「和歌の漢詩的形式化が進む経過を具体的に知ることができるのではないか」と述べている。

『順集』の和歌序については、かつて拙論を述べたことがある。[14] そこで指摘したように、河原院に関わった歌人達は、歌会における和歌序を多く書いている。また、好忠、順、恵慶の百首歌には序がある。さらに、家集の冒頭に書序を冠した歌人がいる。ただ、久保木氏が用例は少ないとしたように、さまざまな資料に収載されているためか、見過ごされてきたようだ。以下で、これらの序を提示し、考察を進めたい。

二、仮名文の和歌序

（一）歌会の序

先ず、歌会で詠まれる和歌に冠せられた序を、制作年が古いと推定される順に示してゆきたい。

序の最初に本稿における略称を□に示す。和歌序と和歌の本文は、〔本文〕以下に示す本による。[15] 底本の本文を改める箇所には、＊印を附し、稿末の注[16]に説明を記す。

現存する河原院の歌人達の歌会における序の中で、最も早くに書かれたと思われるのが、次の源順の序である。

□「西宮の序」〔本文〕西本願寺本『順集』（『国宝西本願寺本三十六人家集』墨水書房・昭和四十六年 1971）

〔標題〕西宮に小さき紅梅を植ゑさせ給ひたりけるを、初めて花咲きたる年、よろこびて、男ども、おの〳〵文字一つを探りてよむうたの序。探りてこ文字をたまはれり。

〔第一段〕あはれ、春のはじめ〈東よりといふを／西宮よりなりけり〉とは、この梅花を見てなむおどろかれける。

〔第二段〕これにより、わがおとゞの君、《倭琴の男ども引きつらねて候はせ給ひ／唐竹の笛の夜一夜遊び明かさせ給ひ》、

〔第三段〕かゝる節を、たゞにやは過ぐすべきとて、《この小木の生ひ出でゝ／万代の老木にならむまで》の心ばへをよませ給ふに、

《白浪の知らぬ身なれど／大淀の仰せ言をば》いかゞ背かむ。

〔和歌〕3梅津川この暮よりぞ流れてのうれしき瀬々は見えむ水底

右の序は冒頭に「西宮」と歌会が催された場所を示す。「西宮」は源高明の邸宅であり、自ずと主宰者も明らかになる。冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本『順集』には「西四条宮中納言」とあることから、高明が中納言であった、天暦二年（九四八）から同七年頃に制作されたと推定されている。[17]

序の標題には、高明が自邸に紅梅の木を植え、その木に初めて花が咲いたことを喜んで歌会を催したことと、詩宴の探韻に倣う探字がなされたこととが記される。[18] 第一段は、西宮の梅の開花を、春は東から来るという五行思想をふまえて表現している。第二段では、管絃をともなう歌会の様子を記している。第三段では、詠むべき和歌の趣向が記され、「白浪の」の一節で和歌のことなど知らない我が身ではあるが、という謙遜の辞を述べて序が結ばれている。

注意されることは、第二段の「倭琴」と「唐竹の笛」との対で、「倭」と「唐」とが対照をなしていることである。この歌会は、開催の契機となった「紅梅」や、「探字」や「序」といった形式、第一段の表現などに、漢文学いわば「唐」の趣向を多く取り入れている。一方で、和歌が詠まれ、序は仮名文で書かれている。すなわち、「唐」の趣向を「倭」言葉によって表現する場となっていると言えよう。第二段は管絃の描写ではあるが、この歌会の特徴を対句によって端的に表しているのではなかろうか。

なお、前稿では、右の「西宮の序」を取り上げて、源順の和歌序の様式と文体の特徴を指摘した。要点を記し、続く序の考察に備えたい。

まず、和歌序の様式の特徴は、その構成が、当時の詩序の構成に倣っており、内容から見て三段に分けられるという点である。[19] 三段はそれぞれ次のような内容である。〔第一段〕歌会の概要、〔第二段〕当日の

風景・歌会の模様の描写――題詠の場合は歌題をふまえた表現をする――、〔第三段〕歌を披講する時の到来・作者の謙遜の辞などの結び、という内容である。また、〔標題〕も詩序と同じ形式で書かれる。以下、それぞれの作品において、試みに標題、三段構成を示す。歌題には「　」を附す。

また、文体[20]は、当時の漢文の文体である駢儷文に倣って対句を多用する。「西宮の序」では、漢文の対句に倣う表現を、上下の句が直接に対偶をなす「直対」に類する部分は「〈…／…〉」で、句を隔てて対偶をなす「隔句対」に類する部分は「《…／…》」で示した。以下の序でも同様に示す。なお「△」は未だ検討を要する箇所である。

「西宮の序」に続いて古い序は、同じく順の句題「松の声夜の琴に入る」の歌の序である。

「野宮の序」〔本文〕新編私家集大成「順Ⅱ」（底本：宮内庁書陵部蔵五一一・二「歌仙家集」）

〔標題〕初めの冬庚申の夜、伊勢の斎宮に侍ひて、「松の声夜の琴に入る」といふことを題にてたてまつるうたの序。

〔第一段〕伊勢の斎宮、《秋の野宮にわたり給ひての後の／冬の山風寒く成りての初め》二十七日の夜、庚申に当れり。〈長々しき夜を／つくづくとやは〉明かさむと思ほして、《御簾の内に候ふおもと人／御階の本に参れるまうち君》たちに〈歌よませ、／遊びせさせ〉給ふ。

〔第二段〕歌の題に曰く、「松の声夜の琴に入る」。これにつけて聞けば、《あし引の山おろしに響くなる松の深緑も／むば玉の夜半に聞こゆる琴のおもしろさも》、一つにみな〈乱れ合ひ／行き通ひ〉て、むべも昔の人の「風松に入る」といふ琴の調べを〈作り置き／伝へ初めけむ〉となむ思ほえける。

〔第三段〕順が《頭のふゝきは、夏も冬も分かぬ雪かと誤たれ、／心の闇は、唐にも倭にもすべてつきなく》、《御前の遣水に浮べる残りの菊に思ひ合はすれば、和泉ばかりに沈める身はづかしく、／名に高き衣笠岡に照るもみぢ葉を見わたせば、かゝる円居に侍ふことさへまばゆけれど》、さもあらばあれ、《世人こそ聞きて譏り笑はめ／かけまくもかしこき御神はあはれとも恵み幸へ給ひてむ》とて、今の古を見るが如く、今宵の事を後の人も見よとて、書き記してたてまつるは、仰せ言に従ふなり。

〔和歌〕163夜を寒み琴にしも入る松風は君にひかれて千代や添ふらむ

序が作られた年時は貞元元年（九七六）十月二十七日庚申の夜、場所は嵯峨野の野宮、宴集の主宰者は伊勢の斎宮規子内親王である。この序が書かれた宴集では、「初雪を翫ぶ（翫二初雪一）」の題で漢文の序も書かれ、『本朝小序集』に収められる。なお、この漢文の序により、この宴集では和歌と漢詩が両方詠まれたと推定される[21]。第三段の「唐にも倭にも」は、漢詩にも和歌にもの意と考えられる。従って、「西宮の序」と同様に、漢文学と仮名文字による文学、和文学とが深く関わる場で、「野宮の序」も制作されたといえよう。

漢詩は残らないが、和歌は順の他に、三首残っている[22]。『拾遺集』

には、内親王の母、斎宮女御徽子の歌が二首（雑上451・452）見える。また、『兼盛集』の一首（兼盛Ⅰ80）も同題の詠とされる。兼盛は、河原院に出入りした歌人の一人であり、後掲するとおり、その手に成る序が一篇残っている。

次に掲げる恵慶の浄土寺における歌会の序は、「野宮の序」と同じ庚申の夜に作られた。恵慶は、安法と、とりわけ親しく交際した歌人とされる。[23]

「浄土寺の序」〔本文〕新編私家集大成「恵慶」（底本：冷泉家時雨亭叢書『資経本私家集三』所収「恵慶集」朝日新聞社・平成十五年2003）

〔標題〕十月廿七日、庚申の夜、東山浄土寺といふ寺にて、あるやむごとなき人、人集めてよませ給、その題は、探りつゝぞよみける。

「落つる紅葉」「深き山の残りの菊」「山の紅葉」「夜の時雨」「庭の苔」「峰の嵐」「初雪」「滝の声」「旅の夢」「雁の声」ばかり、その心あるべしとあれば、序にいはく、

〔第一段〕〈霧のたつ瓜生山のふもと／月の光の浄きみやこ寺〉に、暮れぬべき神無月、二十七日の夜、山の峡に鳴くかのえさるもてあそび給はむとて、《あしひきの山の木の葉散る盛り／むばたまの夜の時雨あはれなる程》、このもかのもに見ゆるいろ〳〵くさ〴〵、時につけて、あはれなる物になむありける。

〔第二段〕その題にいはく、《紅の色々、人の心をそめ乱り／残れる菊さま〴〵、荒れたる籬なまめかし》。《峰の嵐に、旅の夢さめて／暁の露に、おきゐられ》、《雁の秋をすごして、ものさびしき声／鶴も夜深くして、友を恋ふる鹿》、《深き山の雲の白妙に見ゆる／庭の苔深緑なり》。《初雪の色めづらしき／古き巌の神さびたる》心ばへどもなり。

〔第三段〕あはれ我ら、《わたつ海の深き心も知らで／山河のあさましくいひ集めたる》ことゞもを、世の中に流さむこそ、羽束師の森のはづかしけれ。

〔和歌〕探りて、初雪を得たり

165 めづらしきものなりながら初雪はとひ来む人の道やなからむ

滝の声

166 よとゝもに滝の白糸みだるれば夢をだにこそ我はむすばね

序が書かれた歌会の主宰者「あるやむごとなき人」は未詳である。この歌会では「落つる紅葉」「深き山の残りの菊」といった、初冬の山寺にふさわしい歌の題が十題が出され、序はそれらの題をふまえて書かれている。第二段の「残れる菊」に「籬」が彩られているという一節は、陶淵明「雑詩」をふまえている。また、夜の鶴をいう表現は『白氏文集』「新楽府・五絃弾」の「夜鶴憶ㇾ子籠中鳴」による。[24]「探題」の形式にも、漢文学の影響が窺われる。

『恵慶集注釈』[25]は「滝の声」の題に相当する表現のみは見られないとする。なお検討を要するが、序の「深き山の雲の白妙に見ゆる」という部分が、「滝の声」に関わるのではないか。『古今集』には滝を「布」や「白雲」に見立てて詠む歌がある。すなわち「誰がために引

きてさらせる布なれや世をへて見れどとる人もなき」（雑上924・吉野の滝を見てよめる・承均法師）や、「風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞ有りける」（雑上929・同じ滝（比叡の音羽の滝）をよめる・躬恒）である。この二首は、渡辺秀夫氏によると漢詩文的表現が見られる和歌とされる。[26] このような歌をふまえて、序では深い山の雲と見まがう滝が白妙（白い布）のように見えると記されたのではなかろうか。作者は、庭の苔の緑と滝の白という色の対偶をなすため、典拠を知らなくては分かりにくい表現を敢えて用いた可能性がある。

順と恵慶の序が書かれた翌年、貞元二年（九七七）九月には、曾禰好忠が三条左大臣藤原頼忠家における歌合で、序を書いている。

「秋夜の序」〔本文〕萩谷朴 1995『平安朝歌合大成　増補新訂　第一巻』（同朋舎出版・平成七年）（底本：尊経閣文庫蔵十巻本歌合巻八）

〔詞書〕これは、程経て、丹後掾曾禰好忠を召して、秋の夜の心をよませ給へるなり。

〔第一段〕あはれ《我が君の大御代、長月になりゆくなへに／千年をかねて松虫の、声も惜しまぬ大殿に》△、《さゞれ石のなる巌を立てわたし／万代すめる水のほとりに》△、《千種の花は、夜の錦と見えわたり／あまたの虫は、声も惜しまずすだく》夜に、

〔第二段〕△《もろこしや唐の言葉を、千年わかず知ろし召せり／敷島や倭のくにの言葉にて、秋の夜といふ心を奉るべし》といふ仰せを賜はりて、

〔第三段〕△《ゆかぬ心を、雲の上まで通はし／数ならぬ身を、天のうちに尽しつゝ》、過ぎにし夏の汗もよに、記せる言葉烏滸なれど、知るも知らぬも皆人の、名を好忠と申すを頼みて奉るべしと侍るなるべし。

〔和歌〕93水底の影し鏡と濁らねばながれても見む秋の夜の月
94頼もしく聞こゆるものはゆく末をなほ松虫の声にざりける

八月十六日に催された前栽歌合の当日には、菅原文時が漢文の和歌序（本朝文粋・巻十一）と漢字四文字の題とを献じた。[27]「秋夜の序」は、日を改めて九月に好忠が召された時に奉られたものである。好忠は「秋の夜」という題を賜ったが、前栽歌合の三つの題もふまえて序と和歌とを作っている。第一段の「千種の花は」以下の一節は、「岸頭黄花」と「叢中夜虫」という題をふまえていよう。和歌93は、「水上秋月」の題を詠っている。また、第二段では、頼忠は「唐の言葉」を十分ご存知であり、「倭のくにの言葉」で「秋の夜」の題の和歌を奉るべしというご命令をいただいたという。前栽歌合では、漢文の序と仮名日記とが書かれた。日記には、漢詩と古歌が唱えられたとある。第二段は、そのような前栽歌合と、当夜の歌会とを表現した部分と考えられる。前栽歌合には、大中臣能宣、清原元輔、源順、平兼盛、源重之などに加えて、次の序の作者橘正通も召されていた。

橘正通の序は、正通の歿年から天元年間（九七九―九八二）後半の十月晦日に詠まれたと推定される。正通と河原院との関わりは資料の

上では確認されていない。しかし、正通は、大学寮に学び文章生となった人物で、源順の第一の弟子とされる（江談抄・巻五）。また、漢文の詩序が『本朝文粋』（巻十）に三篇残っている。そのうち二篇が具平親王の元で書かれている。

「正通の序」〔本文〕川村晃生・中川博夫1989「〈資料紹介〉内閣文庫蔵『和歌序集』影印（一）」『銀杏鳥歌』二号・平成元年六月（底本：内閣文庫蔵『和歌序集』（特55―23））

〔標題〕△正通序

〔第一段〕〈ちはやぶる神無月の晦日／むばたまの夜半〉に、《旅の御物忌に、ことなし草の葉さし籠もらせ給ひ／しづけき御円居に、さゝがにのいも寝させ給はず》。〈人人あまた候ふ中に／様様に由あるも少なからず〉、《柿の本のまうち君のやうにぞあらねど／花の前の山賤にはよそへらるまじ》。

〔第二段〕かくて〈空の気色もかすかなり／ものの色も深し〉。仰せ言ありて、「庭の紅葉」、「籬の菊」、「夕時雨」、この心ある和歌を奉るべし。

〔第三段〕正通〈老いは残れる菊の兄となり／身は衰へぬる紅葉と異ならず〉、時時身を知る雨、晴るゝとき少なくなむ侍る。〈種種惜しませ給ふよりは／一つ身をやは憐れませ給はぬ〉。度度仰せ言あるにつけても、埋れ木の朽たる言葉を御覧ぜさする、その言葉にいはく。

この序は、『扶桑拾葉集』と『大日本史料』にも収められ、標題を「応詔和歌序」とする。底本をはじめ仮名文の和歌序を収載する書には、「正通序」や「正通」と記されるのみである。序には「庭の紅葉」以下三つの題が示された後、〔第三段〕で作者の謙遜の辞がこれらの題をふまえて書かれる。なお、題「籬の菊」は、「浄土寺の序」と同じく陶淵明の故事をふまえる。謙辞は、自分の年をとった様は残りの菊より年上のようで、身は衰えた紅葉と異ならず、その時その時の身の程を知る雨、つまり不遇を歎く涙は晴れる時が少ないという。この謙辞をふまえ、堀内秀晃氏[28]は、序が書かれた時期について貞元二年（九七七）十月二十九日庚申を示唆する。これについて、中島和歌子氏[29]は、序の中に庚申の語は無いこと、「旅の御物忌」が貴人の「通常の宿所ではない場所での物忌」の意であること、前掲した貞元元年の「野宮の序」と共通する語が多いことから、同じ月の末、野宮における規子あるいは徽子の物忌の折ではないかとする。中島氏の考察には肯われる点が多いものの、正通は、天禄三年（九七二）に規子が主宰した前栽歌合において、師である源順の老いを揶揄する歌「霜枯れの翁草とは名乗れども女郎花にはなほ靡きけり」（二十巻本歌合）を詠んでいる。野宮の歌会であれば順も同席する可能性が高い。そのような場で、自らの老齢を歎く謙辞を書くとは考えにくい。正通の歿年は天元年間の後半かと推定されている[30]。「正通の序」は、「野宮の序」に学んで、正通晩年の、庚申にあたらない十月晦日に書かれ、詳細は不明とするのが穏当と思われる。

次に示す序は、永観三年（九八五）二月十三日子の日に、紫野へ、

円融院が御幸された時に、平兼盛が献じたものである。円融院は、前年八月に譲位されたばかりであった。

「紫野の序」〔本文〕新編私家集大成「兼盛Ⅰ」（底本：宮内庁書陵部蔵五〇六・八「兼盛集」）

〔標題〕無し

〔第一段〕我君、昔ころ、〈民を恵み／国を治め〉おはしますこと数多うて、〈山に登り／水に戯れ給ふ〉大御遊びも見えざりき。《西は小倉山の秋の紅葉、いたづらにその色をうしなひ／東は紫野の春の梅、むなしうその香をうしなひ》、〈岸のくろ水色清う澄み／山の声高うよばふ〉。

〔第二段〕〈風は枝を鳴らさず／雨は土塊を破らず〉、世の中も楽しければ、今日のみゆきもありまするなり。

〔第三段〕限りなき我が君の御徳を、〈老いたるは老いたるをよろこび／若きは若きをよろこぶ〉、世の中の楽しきこと、今日のみゆきをためしとすべし。

〔和歌〕1子日して世の栄ゆべきためしには今日のみゆきを世には残さむ

この序も、「正通の序」と同じく標題を欠く。序は〔第一段〕に円融院の在位中のことを記す。「岸のくろ水色清う澄み、山の声高うよばふ」は、諸注[31]は看過しているが、典故をふまえて、円融院の在位中の御代を称えたと考えられる。後半の典故は、小沢正夫氏によって、『漢書』（巻二十五上）などに見える、武帝が山で万歳を言う声を聞いたという故事であることが指摘されている[32]。前半は、『初学記』（巻六地部中・河第三・事対）などに見える、聖人が生まれる瑞祥として黄河が清むとあることをふまえていよう。

最後に掲げた恵慶の河原院における歌会の序は、増淵勝一氏によって、永観三年（九八五）頃の三月二十一日に作られたと推定されている[33]。主宰者は安法と考えられる。

「河原院の序」〔本文〕新編私家集大成「恵慶」（底本：冷泉家時雨亭叢書『資経本私家集三』所収「恵慶集」朝日新聞社・平成十五年2003）

〔標題〕暮の春、「はるかに山の桜を見る」、かねては、「荒れたる宿の昔の主恋ふる」心ばへの哥、よみ人は、元輔、兼盛、能宣、のぶまさ、兼澄也

〔第一段〕今日、二十一日暮の春になりにけり、残りの春もいくばくならず、空の霞も立ちかへりぬべし、《青柳のいとまのひまに／白真弓はるの山辺にゆき》、《散ちりぬべき花の色をも惜しみ／かへりぬべき鳥の声をもしのばむ》とかたらひて、

〔第二段〕△《たまぼこの道のまに〳〵／あしひきの山のほとり》をたづねゆくほどに、《あかねさす日の暮れぬれば／浅茅原荒れたる宿にとゞまりて》、つれ〴〵とこのありさまを見れば、《岸の松かたぶきて、古き風伝ふるもあはれなり／庭の苔ふりて、昔のあと見えぬもかなし》。《東を見れば、山の桜霞の間よりにほひ／南を望めば、松木拾ふ山がつのゆきかふもいそがし》。かゝるにつけても、物のあはれいとゞしき暮になむありける。

〔第三段〕今日の人々、《柿本のまうちきみにも劣らず／花の前のま*らうどゝするに堪へたる》限りなり。これがなかに、〈松のもとに／苔の衣に〉やつれたる山ぶしあり。《花の山の塵にもつがず／宇治山の風にも仰がぬ》身なれど、白雲のかゝる庭に、召しあげられたれば、空を歩む心地して、物もおぼえずなむありける。

〔和歌〕はるかに山の桜を見る

167 遠目にはなほぞあかれぬ山桜いさ宿かれてゆきて惜しまむ

主無き荒れたる宿

168 植ゑおきし松も岩根もかはらぬに昔の人はいづちなるらむ

〔標題〕に「暮の春」とあり、暮春の歌会にふさわしく、この日、当座の題として「はるかに山の桜を見る」の題が出されている。また、「かねては」と、あらかじめ示された題、兼題も記される。兼題は、「荒れたる宿の昔の主恋ふる」であり、河原院という場に因んだものと思われる。序はこれら二つの題をふまえて書かれている。第三段の作者の謙辞「花の山の塵にも」以下は、古今集の仮名序と真名序を典故としている。なお『恵慶集』には、恵慶の序と歌二首に続いて、安法一首、兼盛二首、元輔二首など参加者の歌が続けて収められる。〔標題〕に名のある能宣の和歌は見えない。

なお、『私家集大成中古1』、『平安朝歌合大成　増補新訂一』、『扶桑拾葉集』で同時代までの序を探した限りでは、ここに掲げた序の他には、延喜七年（九〇七）の大堰川行幸における壬生忠岑の序が見えるのみである。七篇もの仮名文の和歌序が書かれていることは注目に値する。

七篇を見て、すぐに気付かれることは、漢文学と和文学とが深く関わる中で、仮名文の和歌序が制作されていることである。「西宮の序」、「野宮の序」などには、制作の場に漢文学の趣向が取り入れられていた。また、その他の序には、漢詩文の典故をふまえた表現が見られた。

（二）百首歌の序

続いて百首歌の序について検討したい。百首歌は、先述したとおり、天徳末年（九六〇年頃）に曾禰好忠が最初に詠んだとされる。『好忠集』には、好忠の詠んだ百首「好忠百首」と、それを送られた源順が詠んだ返歌の百首「順百首」とが収められる。好忠と順の百首には、それぞれ百首を詠むに至った動機や経緯を、仮名文で記す序が冠される。

さらに、「好忠百首」と「順百首」の後、恵慶の詠んだ百首「恵慶百首」が『恵慶集』に収められる。恵慶の百首も序を有し、〔第一段〕には、次のような記述がある。[34]

我すべらぎや、天徳の末の頃ほひ、字好忠曾丹といふ人、《百千鳥百千の哥をさぐりいだし／石清水のいはまほしきことゞも》、そのありさまは、《春の花の折々につけ／秋の紅葉の色々にふれ》、…中略…物のあはれにおぼゆれば、いひあつめたることゞも、〈春の花／秋の紅葉〉よりも、世の中に散りはてにけり。

右の記述によって、好忠が百首歌を創案したことと、その時期がわか

り、さらに「世の中に散りはてにけり」というように、百首歌が流行するようになった頃に恵慶の百首が詠まれたことが分かる。百首歌の序には注釈も充実しており[35]、ここでは紙幅の都合により、全文を示すことはしない。諸注釈により、「好忠百首」と「順百首」の序には漢詩文を受容した表現が多く見られると指摘されている。一方、「恵慶百首」の序にはそのような指摘はされていない。

前節の歌会の序との先後関係は、天暦二年（九四八）から同七年頃に「西宮の序」が書かれ、その後、天徳末年（九六〇年頃）に「好忠百首」と「順百首」の序が書かれたという順序と考えられる。「野宮の序」より後の歌会の序は、「好忠百首」、「順百首」の序におくれて書かれた作品である。百首歌の流行とともに、歌会において仮名文の和歌序が盛んに書かれるようになったと思われる。

（三）家集の序

河原院の歌人達の家集には、序が見られるものがある。一つは『能宣集』であり、いま一つは『安法法師集』である。『能宣集』の序は「今上花山聖代、また勅ありて同じき集を召す」とあることから、花山朝すなわち永観二年（九八四）八月から寛和二年（九八六）六月の間に書かれたと考えられる[36]。『能宣集』の書序は「それ卅一字の詠、わづかに家風をあふぐ*といへども、万葉集のつたへすでに古賢におよびがたし[37]」と始まる。「家風」は「いへのかぜ」とよまれたのかもしれないが、「古賢」は漢語として用いられていると思われる。以下も、「《男女会接の夕べ、芝蘭折りて契りを結び／遊人餞送のあか月、盃酌を捧げて別れを惜しむ》」など、あたかも五字を連ねる隔句対を訓読したかのような部分が続き、漢語が散見される。他の序は、和語で書かれており、漢語を多用する点がこの序の特徴と思われる。

『安法法師集』は自撰家集で、安保の晩年、永延年間（九八七年から九八九年頃）に成立したと考えられている[38]。安法は、河原院の庵主であり、ごく短い序であるので、次に示す。

「『安法法師集の書序』」〔本文〕新編私家集大成「安法」（底本：宮内庁書陵部蔵五〇一・一九六『安法々師集』[39]）

後の世に見む人は、好けるやうに思ふべけれど、多くの年に、かのはらの山の住まひ、心細き折節の、あはれなることの耐へがたければ、〈春の花の盛り／秋の紅葉落つる〉ほど、〈松風のあはれ夜深きほど／鴛鴦の暁がたの声〉、〈月影の池水に浮び／雁の草むらにかゝり〉、あはれなる折節に、人知れずいひ集めたる言の葉、さま〴〵につけつゝ多かれど、たゞ一二ぞ覚ゆるを、書き集めたるなり。

三、和歌序の特質

（一）複数の和歌に冠する序

以上の和歌序の特質を考察するにあたって、まず確認を要すると思われることは、歌人達が、前節に掲げた歌会の序と百首歌の序および家集の序とを、同じ「序」であると把握していたか否かである。

結論から言うと、おそらく歌人達は、これらの序を、同じ「複数の和歌に冠する序」と捉えていた、いわば同じジャンルの文章であると把握していたと考えられる。そのことは、恵慶の序の次のような表現から推察される。

（イ）「恵慶百首の序」（好忠百首について）物のあはれにおぼゆれば、いひあつめたることゞも、

（自らの百首について）こと好むにはあらねど、深山木こづたふ猿にゝ、いひあつめたる事ども、二の舞になむなりにける

（ロ）「浄土寺の序」あはれ我ら、…山河のあさましくいひ集めたることゞもを、世の中に流さむこそ、羽束師の森のはづかしけれ。

（イ）「恵慶百首の序」では、「好忠百首」と自らの「恵慶百首」のことを「いひあつめたることども」という。また、（ロ）「浄土寺の序」では、歌会に集う自分たちが「あきれるばかりに拙く、たくさん詠み集めた歌を世の中に広めるのは気が引ける」というと考えられる。

「いひあつむ」は、たくさん歌を詠んだり、数多く物語を語ったりしたことを集めるという意と考えられる。例えば『源氏物語』（蛍巻）には「さまざまにめづらかなる人の上などを、まことにやいつはりにや、言ひ集めたるなかにも、わがありさまのやうなるはなかりけりと見たまふ」[40]という用例がある。玉鬘が、数多く語られた物語を集めた中にも、自らのような身の上はないものだと、物語の登場人物の身の上を見て思う箇所である。

次に示す「安法法師集の書序」にも「いひあつめたること」の語が用いられいてる。

（ハ）「安法法師集の書序」人知れずいひ集めたる言の葉、さまゞ〳〵につけつゝ多かれど、たゞ一二ぞ覚ゆるを、書き集めたるなり、

この序では、人に知られずたくさん詠み集めた歌はいろいろな折ごとに多いけれども、ただ一、二首覚えていた歌を書き集めたという。

恵慶と安法ばかりではなく、他の歌人の序においても、彼らが歌会と百首歌および家集の序を、同じ「複数の和歌に冠する序」であると捉えていた節が窺われる。それは、次に示したように、序の末尾に作者名を用いる掛詞の表現が共通して見られるからである。

（ニ）「好忠百首の序」名を好忠とつけしかど、いづこぞわが身人に異なるとぞや。

（ホ）「野宮の序」書き記してたてまつるは、仰せ言に従ふなり。

（ヘ）「秋夜の序」知るも知らぬも皆人の、名を好忠と申すを頼みて奉るべしと侍るなるべし。

天徳末年（九六〇年頃）に書かれた（ニ）では、名前を「よし」という「好忠」と付けたけれど、という。作者自らの名前と、すぐれているという意の「よし」という言葉とを、掛けた表現である。貞元元年（九七六）に書かれた（ホ）では、名前「順」と、命令のお言葉通りにするという意の「従ふ」とが掛けられている。貞元二年の（ヘ）では、「好忠」と「よし。ただ（奉るべし）」とが掛けられている。歌会の序である（ホ）では、（ニ）「好忠百首の序」に倣って、名前を重ねた掛詞が用いられたと考えられる。（ヘ）は、（ホ）の源順の追随に気

を能くした好忠が、翌年同じような掛詞を用いたものだろう。

以上見てきた用語や表現によって、河原院周辺の歌人達は、歌会と百首歌と家集の序を同じジャンルの文章であると捉えていたと考えられる。

当時のジャンル分けの意識を表す資料としては、やや時代が下るものの『本朝文粋』巻八―十一の分類がある。『本朝文粋』では、「序」というジャンルに属する漢文体の作品が「書序」、「詩序」、「和歌序」に分けられる。さらに「和歌序」の中には、「歌集の序文」と「歌会の和歌の序文」とが収められている。ここに見られる体系づけに似通う意識で以て、河原院の歌人達は和歌序という文章を捉えていたと思われる。

（二）漢文学との関わり

河原院の歌人達の和歌序には、漢文学との深い関わりが見られた。

和歌序は、その発生から、漢文学に負う所が多い。和歌序は、詩序に倣って作られるようになったとされる。古く『萬葉集』には、漢文の和歌序が収められる。小島憲之氏は、この先蹤となったのは、『懐風藻』に収められる養老神亀年間（七一五―七二八年頃）に長屋王の詩宴において書かれた序であるとする。[41] 氏は、これらの詩序は、初唐詩に増加した序に倣って、日本ではじめて書かれたものであり、構成や語句などを初唐の序に学んでいると指摘する。大曽根章介氏は、『萬葉集』の序が、「不完全ながらも駢儷文の対句形式を有し、それだけで独立して鑑賞に堪える文章である点が題詞と異なる」と指摘する。[42] その上で、『萬葉集』の和歌序の様式が雑多であり、巻五の大伴旅人の「梅花歌序」のみが後代の和歌序の体裁をなすかとする。

平安朝に入ると、詩序は盛んに制作され、途切れることなく作品が残されている。一方、現存する平安朝の和歌序で制作年代が最も遡るのは、延喜年間（九〇一―九二三年）頃の序である。漢文の序としては、紀長谷雄の「太上法皇賀二玄宗法師八十之齢一和歌序」（本朝文粋・巻十一）や大江千里の「三月三日、吏部王池亭会序」（扶桑古文集）が残る。

注意すべきことは、これらの序と同時期に、はじめて仮名文の和歌序が書かれるようになったと考えられることである。書序としては、延喜五年の日付を有する紀淑望の「古今集真名序」に対応して、紀貫之の「古今集仮名序」が書かれている。また、歌会の序としては延喜七年の宇多法皇の大堰川行幸に際して、紀貫之と壬生忠岑とがそれぞれ仮名文の和歌序を書いている。この行幸では、題を同じくして漢詩と和歌とが詠まれている。詩序は現存しないが、書かれたことが予想される。これらの例から、先ず仮名文の和歌序は、漢文の序に対応して書かれるようになったと思われる。

貫之の二篇の仮名序が創始した文体については、小沢正夫氏[43]が、次の四点の特色を指摘する。第一は「長歌の手法を学んでいる」。第二は「序詞・枕詞・懸け詞を和歌の修辞法から学んでいる」。第三に「漢文として四六文、中国文学のジャンルとして序の形式に学んでい

る」。第四には「漢文訓読文の語彙・語法が混っている」。また、山本利達氏も「貫之の仮名序は、どれも対句仕立てを基本とし、枕詞や序詞によって音調をととのえ、文辞を華美にしたものである」[44]と指摘している。貫之の序について、小沢氏、山本氏が指摘することは、概ね河原院に関わった歌人達の和歌序の文体にも当てはまる。

延喜年間より後、村上花山朝の頃までは、和歌序で現存するものは少ない。漢文の和歌序としては、『本朝文粋』（巻十一）に天暦七年（九五三）以前の作とされる橘在列「春日野遊」や、康保二年（九六五）の藤原後生「奉レ賀二村上天皇卌御算一和歌序」などがある。仮名文の和歌序としては、河原院に関わった歌人たちの序があるのみである。

歌人達の序には、同時期の漢文の和歌序より詩序に近いと思われる点がある。一つは、歌人達の序に謙遜の辞が見られる点である。歌会の序では、「紫野の序」を除く全てにある。百首歌の序は、謙遜の辞を述べる部分が長い。先述のとおり、久保木寿子氏は、「好忠百首の序」が謙遜の辞でのみ構成されるという。家集の序では、「能宣集の序」に「かさねて乾葉の草拾ひて、なまじひに萎花のことばをあつめ*ては」と、自らの歌の拙さを謙遜した表現がある。

平安朝の詩序における謙遜の辞については、木戸裕子氏「平安詩序の形式―自謙句の確立を中心として―」に詳しい[45]。それによると、承平・天暦期には詩序における謙遜の辞がかなり増加するという。実際に源順の詩序十七篇のうち七篇に、橘正通の詩序三篇のうち二篇に謙遜の辞が見られる。一方で、在列や後生の和歌序には謙遜の辞は無い。「野宮の序」と同時に作られた漢文の序には、辛うじて「一の腐儒有り」とのみある。「秋夜の序」に先だって作られた文時の序には謙遜の辞は無い。歌人達の序に見られる謙遜の辞は、同時期の詩序に倣って書かれたと考えられる。

もう一つは、歌人達の序に、同時期の詩序に用いられる「色対」と「数対」とに類する表現が見られることである。これらは、貫之や忠岑の仮名序には見られない表現である。

詩序の具体例として、源順「早春、於二奨学院一、同賦三春生二霽色中一」（本朝文粋・巻八）に見える色対、数対を用いる表現を掲げる。

天台山の高巌を見れば、四十五尺の波白く、
長安城の遠樹を望めば、百千万茎の薺青し。

（見天台山之高巌、四十五尺波白、望長安城之遠樹、百千万茎薺青）

数対は「四十五」と「百千万」であり、色対は波の「白」と薺の「青」をいう部分である。なお、漢詩文の対句の分類を示す『作文大体』（東山御文庫本）の「文章対」には、「色対〔青黄赤白也〕」「数対〔一二三四等也〕」と見える[46]。

河原院の歌人達の和歌序には、次のように色対や数対に類する表現が見られる。表現には、傍線を附す。

（イ）「順百首の序」年経ぬる緑の袖の、忍びに落つる紅の涙にぞ
ひちにけるを、

（ロ）「野宮の序」あし引の山おろしに響くなる松の深緑も、むば玉

の夜半に聞こゆる琴のおもしろさも

（ハ）「浄土寺の序」深き山の雲の白妙に見ゆる、庭の苔深緑なり

（ニ）「河原院の序」青柳のいとまのひまに、白真弓はるの山辺にゆき

数対に類する表現としては、次のようなものがある。

（ホ）「好忠百首」心ひとつをなぐさめんと、百千の歌をよみつゞけ、

（ヘ）「秋夜の序」千年をかねて松虫の声も惜しまぬ大殿に、さゞれ石のなる巌を立てわたし、万代すめる水のほとりに、千種の花は夜の錦と見えわたり

歌人達は、謙遜の辞や、色対や数対に類する表現を、詩序から摂取して共有し、漢文の和歌序より優れた仮名文の和歌序を制作すべく研鑽を続けたのではないかと思われる。

（三）紀貫之の影響

なぜ河原院に関わった歌人達は仮名文の和歌序を数多く書いたのであろうか。

その理由を考える手がかりと思われるのが、高橋和夫氏[17]や、犬養廉氏の指摘である。両氏は、歌人達が河原院を紀貫之ゆかりの地として意識していたとする。『古今集』（巻十六哀傷）には、貫之が、源融の歿後に河原院を訪れて詠んだ歌（852）が見える。貫之の歌をふまえて、安法が、歌を詠んでいるという（安法法師集13）。また両氏ともに言及するのは、歌人達が紀時文に父貫之の家集を借り、それを返す時に詠まれた歌群が存在することである。『後拾遺集』に収められた恵慶の歌を引く。

貫之が集を借りて、返すとてよみ侍ける　恵慶法師

1084 一巻に千々の金をこめたれば人こそなけれ声は残れり

一首は貫之の家集に秀歌が多いことを、秀歌を黄金に擬して称えている。『後拾遺集』には続いて、紀時文の返歌（1085）、元輔の歌（1086）が収められる。三首に加えて、『恵慶集』には能宣が唱和した歌（152）があり、『安法法師集』にもこの折の詠（23）が見える。

先に記したように、貫之は仮名文の「古今集仮名序」と「大堰川行幸和歌序」とを書いている。漢文の序としては、「新撰和歌序」を残している。なお、貫之の「大堰川行幸和歌序」は、『古今著聞集』や、仮名序を集成した書（和歌序集など）に収められ、広く知られていたと思われる。しかし、同じ行幸で作られた忠岑の序は『忠岑集』の一本（冷泉家時雨亭叢書『平安私家集九』所収枡形本）に見えるのみである。

河原院の歌人達が、仮名文の和歌序を書こうと思い立った理由の一つは、先ず、河原院にゆかりのある貫之の和歌序に倣った、貫之が創始した文章を受け継ごうと思ったことではないだろうか。

先に、貫之の序の文体の特色が、歌人達の和歌序の文体にも当てはまることを述べた。ここでは、さらに貫之の和歌序と、歌人達と和歌序との関わりを詳しく検討したい。

まず、様式については、歌会の序の構成が一致している。貫之の「大堰川行幸和歌序」は、その構成を三段に分けて分析できる。先に見たように、歌人達の歌会の序は概ね内容から三段に分けることができた。

また、次に示す表現も、貫之の序から河原院の歌人達の和歌序へと取り入れられたのではないかと考えられる。それは、所の名称すなわち地名や山、川、邸宅の名称を、枕詞、序詞、掛詞などの修辞技法と共に用いる表現である。まず、貫之の「大堰川行幸和歌序」の表現を確認する。

月のかつらのこなた、春の梅津より御舟よそひて、わたしもりをめして、夕月夜小倉の山のほとり、ゆく水の大井の河邊に御ゆきし給へば[48]、

傍線の「かつら」、「梅津」などは実際の地名や山・川の名称である。「月のかつら」は月にあると言われる桂の木と桂の里の地名を、「春の梅津」は花の「梅」と地名「梅津」を掛けている。「夕月夜小倉の山の」の「夕月夜」は夕方のほのぐらさ「小暗」の意から地名「小倉」にかかる枕詞、「ゆく水の大井の河」の「ゆく水の」も万葉集から見られる枕詞である。

河原院周辺の歌人達の歌会の序を見ると、「西宮の序」の「春のはじめ 東よりといふを、西宮よりなりけりとは」という一節では、邸宅の名称「西宮」と方角「西」とが掛けられている。また、「野宮の序」の「伊勢の斎宮、秋の野宮にわたり給ひての後の、冬の山風寒く成りての初め」は、斎宮の「野宮」と「秋の野」を掛け、「冬の山」と対を成す表現である。「浄土寺の序」には「羽束師の森のはづかしけれ」と、地名「羽束師」から、同じ表記の「恥づかし」を導く、地名を序詞のように用いる表現が見られる。百首歌の序では、「好忠百首」、「恵慶百首」に、地名によって古今集の和歌をふまえ、掛詞にした表現がある。また「恵慶百首」の序には「耳なしの山の聞き知らぬ耳にも」と、大和国の「耳成山」に「耳無し」を掛けて、「聞き知らぬ」を導くという表現がある。

加えて、歌人達は、貫之の序から表現方法を学ぶだけではなく、貫之の序そのものを典故として用いたのではないかと考えられる。

「古今集仮名序」をふまえたと推定されるのが、次の（ト）から（ワ）の表現である。「◇」以下に、典故と考えられる「古今集仮名序」を示す。なお、「古今集真名序」が、共にふまえられている部分「＊」がある。

（ト）「河原院の序」今日の人々、柿本のまうちきみにも劣らず

（チ）「正通の序」柿の本のまうち君のやうにぞあらねど、花の前の山賤にはよそへらるまじ

◇正三位柿本人麿なむ歌のひじりなりける。◇大伴黒主はそのさま賤し。言はば薪負へる山人の花の陰にやすめるがごとし。

＊真名序「田夫の花の前に息めるが如し（如田夫之息花前也）」

（リ）「河原院の序」花の山の塵にもつがず、宇治山の風にも仰がぬ身なれど、

◇宇治山の僧喜撰は言葉微かにして

＊真名序「華山の僧正は尤も歌の体を得たり（華山僧正尤得歌体）」

（ヌ）「好忠百首の序」春は散りぼふ花を惜しみかね、秋は落つる木の葉に心をたぐへ、

（ル）「安法法師集の序」春の花の盛り、秋の紅葉落つるほど

◇又春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き[49]

（ヲ）「好忠百首の序」ひを虫の一日をくらし、＊草葉の玉の風を待つほどなれば、水の泡よりも殊に、春の夢よりも異ならず、

◇草の露、水の泡を見てわが身を驚き

（ワ）「順百首の序」心のうちに思ひけることの葉にあらはし、

◇やまと歌は人の心を種として万のことの葉とぞなれりける、……心に思ふ事を見るもの、聞くものにつけて、いひいだせるなり[50]

右のように、歌人達は、貫之の序を典故とすることにより、自らの序が、貫之の文章を継承していることを示そうとしたと思われる。

『恵慶集』には、詞書に「つらゆきがとさの日記を、ゑにかけるを、いつとせをすぐしける家のあれたる心を」という一首（182）がある。この詞書は、貫之が『土佐日記』の作者であることを記す現存最古の資料として、よく紹介される。この詞書はまた、恵慶が貫之の仮名文に関心を持っていたことをも示していると思われる。先に、歌人達の序に「色対」と「数対」とに類する表現が見られ、これらの表現が貫之の序には見られないことを述べた。しかし、『土佐日記』には、色や数を対にした表現が多く見られる。歌人達の序の「色対」と「数対」とに類する表現は、文体は異なるものの、同じ貫之の仮名日記の表現を、同時代の詩序も参考にして仮名序において試みたものかもしれない。歌人達は、貫之の文章を継承するだけではなく、発展させる方向を探っていた可能性がある。

四、おわりに

以上、小稿では、河原院の歌人達の多くが歌会の序、百首歌の序および家集の序を書いていることを指摘した。これらの仮名文の和歌序には、共通する用語や表現が見られ、歌人達は和歌序を「複数の和歌に冠する序」と捉え、いわば同じジャンルの文章であると把握して書いていたと考えられる。

これらの序の特質としては、まず漢文学との深い関わりが見られることが挙げられる。歌人達は、同時期の詩序の技法を取り入れ、先行する和歌序には見られない独自の工夫をしている。

河原院の歌人達が、仮名文の和歌序を書いた理由の一つは、紀貫之の和歌序に倣い、貫之が創始した文章を受け継ごうとしたからだと考えられる。河原院は貫之が和歌を詠んだ旧跡であり、歌人達は、貫之の子孫にその家集を借覧しており、彼を敬慕していたと考えられる。歌人達の和歌序を検討すると、貫之の和歌序の文体や様式、表現に学んでいることが明らかである。

河原院の歌人達は、仮名文の和歌序の継承と展開にも重要な役割を果たしたと考えられる。

【付記】
本稿は、平成二十七年十月十一日、岡山大学で行われた和歌文学会第六十一回大会における研究発表に基づく。席上、また発表後に御教示を賜った諸先生方に感謝申し上げる。
なお、本稿は平成二十八・二十九年度科学研究費補助金（研究活動スタート支援）による研究成果の一部である。

【注】

（1）引用は前田育徳会尊経閣文庫 1998『拾芥抄』（尊経閣善本影印集成・八木書店・平成十年）による。私に読点を加えた。行間には「号東六條院イ」と異本注記がある。

（2）山崎正伸 1994「古今集前後の河原院―河原院をめぐる史実性を求めて―」『古今集とその前後』（和歌文学論集・風間書房・平成六年）参照。

（3）犬養廉 1967「河原院の歌人達―安法法師を軸として―」『国語と国文学』四十四巻十号・昭和四十二年十月（同氏『平安和歌と日記』所収・笠間書院・平成十六年 2004）。以下の犬養氏の説はすべてこれによる。

（4）藤岡忠美 1966『平安和歌史論』（桜楓社・昭和四十一年）「沈淪のうた」参照。

（5）山口博 1967『王朝歌壇の研究　村上冷泉円融朝篇』（桜楓社・昭和四十二年）「沈淪歌壇の性格」参照。

（6）川村晃生 1986「和歌と漢詩文―後拾遺時代の諸相―」『中古文学と漢文学Ⅰ』汲古書院・昭和六十一年（同氏『摂関期和歌史の研究』所収・三弥井書店・平成三年 1991）参照。

（7）近藤みゆき 1990「平安中期河原院文化圏に関する一考察―曾禰好忠・恵慶・源道済の漢詩文受容を中心に―」『千葉大学教養部研究報告』A―22・平成二年三月（同氏『古代後期和歌文学の研究』所収・風間書房・平成十七年 2005）参照。

（8）西山秀人 1992「源順歌の表現―好忠および河原院周辺歌人詠との関連―」（『和歌文学研究』六十四号・平成四年十一月）参照。

（9）注（4）藤岡前掲書「百首歌の創始をめぐって」参照。

（10）久保木寿子 1992「初期百首と私家集―好忠百首を中心に―」（『王朝私家集の成立と展開』和歌文学論集・風間書房・平成四年）参照。

（11）金子英世 1993「初期百首の季節詠―その趣向と性格について―」（『国語と国文学』平成五年八月）など参照。

（12）松本真奈美 2005「恵慶百首について―好忠百首・順百首との関連―」（『尚絅学院大学紀要』五一・平成十七年）など参照。

（13）注（10）久保木論文参照。

（14）拙稿 2013「『順集』の「うたの序」―源順における和歌序と詩序―」（『国語国文』平成二十五年六月）。以下「前稿」は、この論文を指す。

（15）底本の本文は、稿者の判断により、清濁を分かち、句読点を附す。底本の仮名を漢字に改める場合は、元の仮名を振り仮名として残す。底本の仮名遣いは歴史的仮名遣いに改め、当て字・異体字は仮名または通行の字体に改めるが、元の仮名・当て字は右傍に記す。ただし、漢字に改める場合の仮名遣いは底本のままとする。反復記号「ゝ」「〳〵」は底本のままとする。

（16）『西宮の序』『順集』の現存諸本は二類七系統に分類されている。諸系統を代表する本で、「西宮の序」所載本は、〔本文〕の西本願寺本を含めて二類四系統の本である。西本願寺本以外の本は次のとおり。（　）内は略称。第一類の冷泉家時雨亭文庫蔵藤原資経筆本（資）、第二類では冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本（坊）と、宮内庁書陵部蔵五〇一・四九「続小草内和歌」（草）。「男（*をのこ）ども引（ひ）きつらねて」は、底本では「をのこどもをひきつらねて」。資本により改める。「夜（*よひと）一夜」は、底本では「よろつ夜」。坊・草本により改める。「生（*む）ひ出（い）でゝ」は、底本では「おひいてし」。坊・草本により改める。なお、『順集』の作品番号は、『新編私家集大成』「順Ⅱ」による。

『野宮の序』底本は西本願寺本『順集』完本時の転写本と目される。なお、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースの画像を参照した。校訂箇所は以下のとおり。「野宮の序」所載本は底本を含めて二類四系統の本である。底本の他の本は、いずれも冷泉家時雨亭文庫蔵の〔第一類〕藤原資経筆本（資）、素寂本（素）、および〔第二類〕坊門局筆本（坊）である。〔標題〕「（*）ことを題にて」は底本「たいして」。資・素・坊本により改める。〔第一段〕「秋の野宮（*のみや）」は底本「あきのゝみや」。素本により改める。「成（*な）りての」は底本「成て」。資・素・坊本により改める。「参（*まゐ）れる」は底本

「まいる」。素・坊本「まいれる」により改める。〔第二段〕歌題の「松の声」は底本「松のかせ」。資・坊本により改める。「琴」は底本「事」。「昔の人の」は底本「むかしの」。素・坊本により改める。資本「むかしの人」。「琴の調べ」は底本「ことのしく」。素・坊本により改める。「伝へ初めけむ」は底本「そめけむ」。資本により改める。素本「ツタヘケム」。坊本「（つくりそめ）つたへおきけむ」。〔第三段〕「夏も冬も」は底本「夏冬も」。資・素・坊本により「も」を補う。「つきなく」は底本「つれなく」。資・素・坊本により改める。「はづかしく」は底本「はしかしふ」。資・素本により改める。「衣笠岡に」は底本「きぬかさをか」。資・素本により「に」を補う。「世人」は底本「と人」。資・素・坊本により改める。「かけまくも」は底本「かけはくも」。資・素・坊本により改める。「今の古」は底本「いにしへ」。資・素・坊本により「いまの」を補う。「仰せ言」は底本「おほむこと」。資・素・坊本により改める。『浄土寺の序』「恵慶集」の現存諸本は二類三系統に分類されている。諸系統を代表する本で恵慶の二篇の序を所載する本は、底本と越桐喜代子氏所蔵本（前田家旧蔵本）の二類二系統である。越桐氏所蔵本（越）は、熊本守雄 1978『恵慶集　校本と研究』（桜楓社・昭和五十三年）の影印を参照した。〔標題〕「十月廿七日」は底本「十一月廿七日」、越本「十月廿よ日」を、〔第一段〕「暮れぬべき神無月」により改める。なお、『恵慶集』の作品番号は『新編私家集大成』「恵慶」による。『秋夜の序』底本は、『大日本史料』第一篇之十六（東京大学出版会・昭和四十三年 1968）に影印が所載されており参照した。『正通の序』「正通の序」は、底本と同じく和歌仮名序を集めた書である内閣文庫蔵『借名序』（204—148）と、肥前松平文庫『序集』（117—7）に収められる。また、『扶桑拾葉集』巻三と、『大日本史料』第一編之十四「橘正通ノ事蹟」に「塙史料所収」として収載される。なお、内閣文庫蔵の二本は国立公文書館デジタルアーカイブの画像を、『序集』は国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースの画像を参照した。また、『扶桑拾葉集』の本文は明治三十一年 1898 刊の活字本により、誤植の訂正や巻数は国立公文書館デジタルアーカイブの内閣文庫蔵（204—143）本（紅葉山文庫旧蔵、刊本）を参照する。〔標題〕底本と『序集』とが「正通序」。『借名序』は九字ほど下げて「正通」と記す。『扶桑拾葉集』と『大日本史料』とは標題を「応詔和歌序」として、別に「橘正通」と作者名を記す。〔第一段〕「しづけき」は底本「しつけよ」。『序集』、『借名序』は底本に同じ。『扶桑拾葉集』、『大日本史料』は「しつてに」。中島和歌子 2007「和歌文学と陰陽道—方違翌朝の歌、中臣祓と歌言葉、橘正通序の忍草の物忌札他—」（藤本勝義編『平安文学と隣接諸学2　王朝文学と仏教・神道・陰陽道』竹林舎・平成十九年）の指摘により改める。〔第二段〕「夕」は、『借名序』に「ゆふへの」とあること、「ゆふしぐれ」の語の和歌における用例が新古今集の成立前後から見られることから、「ゆふべの」と振り仮名を附す。『紫野の序』底本は、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースの画像を参照した。『兼盛集』の現存諸本は三類五系統に分類されている。このうち「子日して」の一首に、序文を有するのは、第一類本の底本の系統のみ。同じく第一類本の真観本（冷泉家時雨亭叢書『平安私家集八』所収）などの系統では詞書に「円融院のむらさき野のみゆきに松をみて」とあり和歌序は所載されない。第三類本の冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本でも詞書に「ねの日」とのみある。また、「兼盛の序」は、『扶桑拾葉集』巻三に所収される。『扶桑拾葉集』（以下、扶）では、標題は「子日行幸奉和歌序」、作者名は「平兼盛」とある。〔第一段〕「水に戯れ」は底本「嶺にたはれ」。扶本「みつにたはふれたまふ」。『論語』（雍也篇）「知者楽水、仁者楽山」をふまえた山と水との対と考え校訂する。「西は小倉山の秋の紅葉いたづらにその色をうしなひ」は底本「西はをくら山秋の紅葉をいたつらにうしなひ」を、扶本の本文により改める。「東は」以下と対をなす。高橋正治 1993『兼盛集注釈』（私家集注釈叢刊・貴重本刊行会・平成五年）参照。〔第三段〕「若きは若きをよろこぶ」は底本に無し。老若の対と考え扶本により補う。なお、扶本は末尾に「…ためしとすべし、つげしめてその日の和歌」とある。『兼盛集』の作品番号は『新編私家集大成』「兼盛Ⅰ」による。『河原院の序』〔標題〕「荒れたる宿の」は底本「あれたるやと」。越本により「の」を補う。なお、越本には「暮の春」に続いて「かはらの院にて、はるかに……」とある。〔第三段〕「まらうど」は底本「まうとゝするに」。越本により校訂する。

(17) 神野藤昭夫 1983「《源順伝》断章—撰和歌所寄人となるまで—」（『跡見学園女子大学国文学科報』十一号・昭和五十八年三月）および西山秀人校注「順集」（和歌文学大系『三十六歌仙集（二）』明治書院・平成二十四年

2012）参照。

（18）丹羽博之 1985「源順における和歌と漢詩―「探字」の和歌と探韻―」（『平安文学研究』七十三輯・昭和六十年六月）参照。

（19）ここでいう段とは、序の内容の一区切りの意で、序を分析する目安とするものである。段落とは異なる。前稿および佐藤道生 1998「詩序と句題詩」（同氏『平安後期日本漢文学の研究』所収・笠間書院・平成十五年 2003、初出平成十年）参照。

（20）ここでいう文体とは、用語や語法などの違いから区別される文章表現の類型の意である。

（21）拙稿 2016「斎宮規子内親王野宮庚申の和歌序二篇について―「松の声夜の琴に入る」と「初雪を翫ぶ」―」（『国語国文』八十五巻九号・平成二十八年九月）参照。なお、両序の大意と語釈を示した。

（22）『大日本史料』第一編之十六（東京大学出版会・昭和四十三年 1968）参照。

（23）熊本守雄 1978『恵慶集　校本と研究』（桜楓社・昭和五十三年）第二編第三章「恵慶法師と安法法師との交遊」参照。

（24）川村晃生・松本真奈美 2006『恵慶集注釈』（私家集注釈叢刊・貴重本刊行会・平成十八年）に指摘がある。『白氏文集』の引用は、四部叢刊所収の那波道円本による。

（25）注（24）『恵慶集注釈』。

（26）渡辺秀夫 1991『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社・平成三年）第一篇第六章「古今集歌にみる漢詩文的表現―対照・一覧稿」参照。

（27）この歌合の漢文の和歌序、題については、拙稿 2017「三条左大臣殿前栽歌合について―「遣水虫の宴」の趣向―」（『文学史研究』五十七号・平成二十九年三月）参照。

（28）堀内秀晃 1971「橘正通伝記考」（『東京医科歯科大学教養部研究紀要』一号・昭和四十六年）。

（29）中島和歌子 2007「和歌文学と陰陽道―方違翌朝の歌、中臣祓と歌言葉、橘正通序の忍草の物忌札他―」（藤本勝義編『平安文学と隣接諸学 2　王朝文学と仏教・神道・陰陽道』竹林舎・平成十九年）。

（30）注（28）堀内論文参照。

（31）高橋正治 1993『兼盛集注釈』（私家集注釈叢刊・貴重本刊行会・平成五年）および徳原茂実校注「兼盛集」（和歌文学大系『三十六歌仙集（二）』明治書院・平成二十四年 2012）参照。

（32）小沢正夫 1963『古代歌学の形成』（塙書房・昭和三十八年）。

（33）増淵勝一 1984-1986「源兼澄伝の再検討―『兼澄集』を中心として―」（『平安朝文学成立の研究　韻文編』国研出版・平成三年 1991、初出昭和五十九―六十一年）。

（34）以下、考察に際して引用する本文は以下の書による。「好忠百首」と「順百首」は、島田良二編『曾禰好忠集　宮内庁書陵部蔵　伝冷泉為相筆』笠間書院・昭和四十七年 1972（底本：宮内庁書陵部蔵五〇三・二二六『好忠集』）。なお、好忠序の「一日をくらし」は底本「し」無し。「なぐさめんと」は底本「なくさむとも」。以上の二箇所は、天理図書館蔵伝二条為氏筆本により校訂する。「恵慶百首」は、『新編私家集大成』「恵慶」（底本：冷泉家時雨亭叢書『資経本私家集三』所収「恵慶集」朝日新聞社・平成十五年 2003）。なお、序の「百千鳥」は底本に無し。越本により補う。「さぐりいだし」は底本「さへにいたし」。越本により校訂する。

（35）「好忠百首」「順百首」は、松田武夫校注「好忠集」（日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』・岩波書店・昭和三十九年 1964）、神作光一・島田良二 1975『曾禰好忠集全釈』（笠間書院・昭和五十年）、松本真奈美校注「曾禰好忠集」（和歌文学大系『中古歌仙集（一）』明治書院・平成十六年 2004）、川村晃生・金子英世 2011『『曾禰好忠集』注解』（三弥井書店・平成二十三年）など参照。「順百首」のみの注釈書として、筑紫平安文学会 2013『順百首全釈』（歌合・定数歌全釈叢書・風間書房・平成二十五年）がある。「恵慶百首」は、注（24）『恵慶集注釈』および筑紫平安文学会 2008『恵慶百首全釈』（歌合・定数歌全釈叢書・風間書房・平成二十年）がある。

（36）「今上花山聖代」は元は「今上」に注記されていた「花山」が、後に本文化したとされる。増田繁夫 1992「能宣集の序文「今上花山聖代」」（『和歌史研究会会報』一〇〇・平成四年十二月）および同氏『能宣集注釈』（私家集注釈叢刊・貴重本刊行会・平成七年 1995）参照。

（37）『能宣集』の本文は『新編私家集大成』「能宣Ⅰ」（底本：西本願寺蔵三十六人集「よしのふ」）による。『能宣集』の現存諸本は三系統に分類されている。書序を有するのは、底本の系統のみである。以下の校訂は、注（36）

『能宣集注釈』を参照した。「あふぐ*」は底本「あふけ」。「あつめて*」は底本「あつて」。

(38) 犬養廉・後藤祥子・平野由紀子校注「安法法師集」(新日本古典文学大系『平安私家集』岩波書店・平成六年 1994)。

(39) 底本は、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースの画像を参照した。なお、底本の親本は、冷泉家時雨亭叢書『資経本私家集二』所収「安法法師集」(朝日新聞社・平成十三年 2001) とされる。また、その資経本を書写した本が、冷泉家時雨亭叢書『承空本私家集上』所収「安法法師集」(朝日新聞社・平成十四年 2002) とされる。両本を参照した。

(40) 本文は石田穣二・清水好子校注『源氏物語四』(新潮日本古典集成・新潮社・昭和五十四年 1979) による。

(41) 小島憲之 1965『上代日本文学と中国文学　下―出典論を中心とする比較文学的考察―』(塙書房・昭和四十年)、第六篇第一章「懐風藻の詩」参照。

(42) 大曽根章介 1988「和歌序小考」(犬養廉編『古典和歌論叢』明治書院・昭和六十三年、『大曽根章介　日本漢文学論集　第一巻』所収・汲古書院・平成十年 1998)。

(43) 注 (32)『古代歌学の形成』(塙書房・昭和三十八年)、第一編第二章「仮名序」。

(44) 山本利達氏 1970「大井川御幸和歌序―貫之の序―」(『国語国文』昭和四十五年四月、同氏『中古文学攷』所収・清文堂出版・平成十五年 2003)。

(45) 木戸裕子 1990「平安詩序の形式―自謙句の確立を中心として―」(『語文研究』六十九号・平成二年六月)。

(46) 引用は小沢正夫 1963「校訂作文大体」(『説林』11・昭和三十八年九月) による。

(47) 高橋和夫 1958「源氏物語「六条院」の源泉について」(同氏『源氏物語の主題と構想』桜楓社・昭和四十一年 1966、初出昭和三十三年)。

(48) 本文は永積安明・島田勇雄校注『古今著聞集』(日本古典文学大系・岩波書店・昭和四十一年 1966)「巻十四・遊覧第二十二 479」による。

(49) 注 (35)『『曾禰好忠集』注解』に指摘がある。

(50) 注 (35) 松本真奈美校注「曾禰好忠集」に指摘がある。

【二〇一七年八月三十一日受付、十一月一〇日受理】

The Prefaces of Waka anthologies by the poets in Karawa-no-In--a study of the collection, textual collation, characteristics and value of those Waka prefaces--

YAMAMOTO Mayuko

In Heian period, particularly in about 960-986 (from the end of reign of Emperor Murakami to that of Emperor Kasan), about 10 poets associated many times in Kawara-no-In (河原院 riverside temple), with the chief priest Anpō (安法) as the central figure. According to past studies, the poets developed the new expressions in Waka, then influenced the creation and spread of "Hyakushu-ka (百首歌 one hundred Waka)" deeply, which were composed energetically in later years and contributed to the history of Waka.

But attention has scarcely been paid to the fact that they composed many prefaces of Waka in Kana alphabet. This study examines the character and value of these prefaces in the Waka history. Prefaces of Waka were placed at the beginning of poems in Waka anthologies or Waka parties. These told the details and the motives with sophisticated rhetoric. It is said that the preface of Waka was created by Ki-no-Tsurayuki (紀貫之 ?-945?). Poets composed prefaces so that they placed them in the head of parties, "Hyakushu-ka", and private anthologies of Waka poetry. These prefaces have the common expressions, which shows that the poets took in Chinese classical literature. Briefly, the poets in Kawara-no-In played an important role in the succession and development of Waka prefaces.